

会議結果報告書

令和7年12月25日

会議の名称	令和7年度 第2回 舞鶴市発達支援体制検討会議	
種別	☐ 附属機関 ☒ 懇話会等	
開催日時	令和7年12月11日(木) 13時30分～15時30分	
開催場所	舞鶴市中総合会館3階 集団健診室	
出席者	委員:小谷裕実、村田淳、四方あかね、橋本由紀、阪口靖敬、金子亜佑美 関係者:内藤信雄、楠崇智、仲川真広、足立典子、梅田めぐみ、神原真規子、村尾茜 事務局:瀬野勝久、尾橋淳子、飯田美和、野田諭史、鎌部晶子、後野香織、小森昌子、栢分美香、真下知子、堀井由美子、岸田由紀子、長沢凜、植田葵、内藤恵美	
議題	(1) 第1回 舞鶴市発達支援体制検討会議の報告 (2) 大学における発達支援の取り組みの現状及び課題について (3) 意見交換 ・切れ目ない支援体制について ・こどもを取りまく支援者の資質の向上について	
公開の区分	☒ 公開 ☐ 部分公開 [理由]	
傍聴者数	2 名	
審議結果 及び 主な意見等	別紙参照	
会議録の作成様式	☐ 詳細 ☒ 要約	
備考		

担当課	舞鶴市 健康・こども 部 こども家庭しあわせ 課 TEL (0773) 68 - 9155
-----	--

令和7年度 第2回 舞鶴市発達支援体制検討会議 議事録【要約版】

I.開催日時 令和7年12月11日(木) 13時30分～15時30分

II.開催場所 舞鶴市中総合会館

III.出席者(敬称略)

委員:小谷裕実、村田淳、四方あかね、橋本由紀、金子亜佑美、阪口靖敬

関係者:楠崇智、内藤信雄、仲川真広、足立典子、梅田めぐみ、神原真規子、村尾茜

IV.議事

1.第1回 舞鶴市発達支援体制検討会議の報告(資料参照)

2. 大学における発達支援の取り組みの現状及び課題について(村田委員)

- 学生数の増加と特性:

- 日本の大学における発達障害のある学生は、**この15年間で100倍に増加**(2006年127⇒2023年11,706人)している。ただし、学生が自ら申告しないとカウントが難しく、実際の人数はもっと多いと予想される。
- 欧米と比べ、日本の大学では発達障害のある学生のうち、**LD(学習障害、特に「書き」)の割合が著しく低いことが特徴**である。インプット・アウトプットの方法を変えることで学力を伸ばすことが可能である。GIGAスクール構想など初中教育が変化していくことから、教育のカテゴリーをあげることや選択肢が広がる可能性がある。

- 大学での主な困難さと支援のあり方:

- 学生の多くは特性を隠して入学し、後から相談に来る場合が多い。
- 中高では、勉強への適応ができていると、他の部分の優先順位は下がるが、**大学や社会では、学力以上にコミュニケーション力や社会性、協調性が求められる。**
- 大学では、高校までと異なり、自分の席や担任といった構造的なサポートがないため、**履修登録や学内での自由な移動など、自由度が高い一方で自己責任も強まる環境**となる。結果、学力よりも**対人関係上の問題や生活設計、二次障害(睡眠障害やうつなど)**といった困りごとが現れる。
- 支援は個別の支援と、合理的配慮などの「環境調整」を組織側から提供する視点が重要である。

- 自己認識とセルフアドボカシーの重要性

- 学生自身が自己認識、自己理解、セルフアドボカシー(自己権利擁護)の能力を身につけることが社会進出の鍵となる。全部自分でできることを目指すのではなく、**自分でできることと誰かにお願いすることを切り分ける力をつけることが大切である。**
- **発達段階に応じて、本人が自分の状態像をいかに表現していけるか**という「相談スキル」を支援していくことが、社会との接続において重要になる

- 切れ目のない支援体制:

- 教育関係者や支援者は、今どうするか現状への適応だけでなく、子どもたちが向かう次のフィールドから逆算した長期的な視点で支援を行う必要がある。
- **教育のカテゴリー(学校段階)が変わると、それぞれ求められることや状況が変化するため、スムーズな接続・移行支援には、複数の段階の関係者が交わり、「自分たちの仕事を言語化し」大人側が教育段階ごとの違いをしっかりと理解して一緒に考えることが重要な要素である。**

3.切れ目のない支援体制について(意見交換)

※切れ目ない支援体制の構築のために、①自施設で②他機関と一緒に③市全体で工夫できることについて意見交換を行った。

(事務局提案)

- **幼稚園・こども園から放課後等デイサービスへの移行支援体制**
 - どの園・事業所でも連携できるよう、保護者の同意に基づき情報共有を行うための連絡会の開催や、保護者が発達支援ファイルを提示し、放課後等デイサービスと効果的に連携が取れる仕組みを提案。
- **0歳から18歳までの現行の接続体制**
 - 小学校から中学校への接続では、「アセスメント表、個別の指導計画、個別の教育支援計画」の3点セットを用いて連携を図っているものの、市全体で様式が統一されていない点が活用する上での課題である。

(意見交換)

①支援における気づきと連携の工夫

- 大学では、「学生が自ら困りごとを伝える」ことから支援が始まるのに対し、幼稚園・こども園では、「保護者や職員の『気づき』がスタートライン」となる。もれなく気づいて、支援の流れにつなげる工夫が必要である。

②将来の自己表現につながる幼児期の指導

- 幼稚園では、「個別に手先を動かしたり、生活するのに必要な技術」を習得する時期と、「友達と遊んでコミュニケーションや、言葉を見つけていく時期」がある。これらの幼児期の関わりが、大学生になって「自分の思いを表現したり、困りごとを伝える力」につながると思う。これを意識した幼児期の関わりのポイントは何か。
- 大きくなってから人に相談できる力の一番のベースは、「人間っていいな」と思える経験をたくさん積むこと。このために、大人はどんな些細なことでも親身になって聞き、相談したら解決したという経験を重ねることが大切である。
- 支援を受ける上で困難や必要な配慮を本人が表現できるように支援していくことが、教育機関において求められる。表現の質は、幼児期と大学生とで異なるが、「言っても大丈夫」という雰囲気作りがシームレスな支援につながる。

③支援者育成の工夫

- 幼児期に関わる職員に研修等はしているが、加えて外部の専門職（キンダーカウンセラー）の助言が気づきや支援の力になっている。

④長期的な視点と評価方法の見直し

- 特別支援教育の観点から、支援に関わる教師一人ひとりが、現場での指導力向上だけでなく、0歳から18歳まで、こどもたちの生きていく世界がどう変わり、各機関でどのような支援を受けているかを、俯瞰的に捉えることが重要である。そのため、今後は各機関の見学などを通じて理解を深める研修へと移行する方針。
- 短期的な視点やその場への適応のみで評価しがちだが、子どもの長期的な成長の視点に立ち、子どもの見立て方を捉え直す必要がある。

⑤当事者を中心にしたシームレスな支援

- 支援においては、「あなたのことはあなたに聞く」というスタンスを常に示し、情報や選択肢を与えて一緒に選ぶ経験を重ねることが重要である。
- 「みんなと同じ目標に、自分らしく違うやり方でアプローチできる」という視点を本人と周囲の文化として作っていくことが、スティグマを減らし、必要な支援を受け入れやすくするために大切である。

4. こどもを取り巻く支援者の資質向上について(意見交換)

※支援者の資質の向上のために、①自施設で②他機関と一緒に③市全体で工夫できることについて意見交換を行った。

(事務局説明)

- 現行の研修体系の説明及び、研修が体系的でない点が改善点と提案。

①生徒理解を深める現場見学と複数教員での状況把握の工夫

- 高校では府のスーパーサポートセンター提供の動画などを活用した全職員研修を実施している。
- 生徒の中学校・小学校・就学前など、以前の段階の様子がイメージしにくいという課題があり、現場に実際に行き、どのような教育を受けて現在の学校にたどり着いたかを知るための、現場見学や自然な交流が特に必要である。
- 高校の生徒の状況把握においては、今年度から発達状況の調査を担当だけでなく、関わる教科の教員など複数で行った結果、担任以外の視点から生徒の新たな特性や、思い込みとの違いが判明した。**複数の教員で子どもを見て話し合うことが、生徒への理解を深め、適切な支援へと円滑につなげるために重要**である。

②相互の現場見学・交流による支援者の資質向上

- **支援者の資質向上には、実際に現場に足を運び、見て感じる事が不可欠**であり、職員自身が現場で課題を直接感じなければ、その後の行動変容にはつながらない。学校が未就学児を支援する側を見学するだけでなく、園の卒園生が学校(小・中・高・大)でどのように成長し、どのような困難を抱えているかを知ること、未就学児の支援を担う職員にも学びがあるので、**相互に現場を見学・交流すること**を提案する。
- 幼児期は、保護者に対して、その先の小・中・高・大における学びや支援の可能性について**正しい理解を促す機会**を設け、それが保護者の**選択肢**となり、子どもの支援にプラスに働くような仕組みが必要である。

③継続的な研修を促す仕組みの構築

- 保育業界で2017年頃から導入されたキャリアアップ研修制度は、研修受講歴が個人のキャリアパスポートに記録されるだけでなく、職員の処遇改善手当と連動することで、研修受講を促進したが、多くの職員が必要な研修項目を修了したことで、「もうこれ以上受講する必要がない」という逆の現象が起き始めている。そのため、**「舞鶴版の研修体系」を独自に作り、受講によるメリット(施設・職員への利益)の可視化や施設や職員の受講状況の把握を通じて継続的な研修を促す仕組みの構築を図って**はどうか。

④アウトプットの機会の充実

- 研修を受けるだけでなく、職員が自ら学びを深め成長するために、**公開保育や事業所公開**といった、**自施設を公開し、相互に学び合う「事業所を公開する文化」**を舞鶴市内で広げる。

⑤放課後等デイサービスにおける職員研修の課題と必要性

- 放課後等デイサービス(放デイ)では、職員の資格が多様(保育士、教員、作業療法士など)であるため、共通の視点や統一された支援方法を持つことが難しい。また、事例に基づく研修やキャリア研修制度がないため、職員が同じ視点で学ぶ機会が不足し、支援の方向性を合わせたり、人材育成に大きな課題を抱えている。**共通の方向性をもった支援を可能とするために、市として研修の機会を設けることを提案**。

⑥教育課程の弾力化：特別支援教育の発想を活用した支援の推進

- 学習指導要領の改訂に伴い、文部科学省は「**教育課程の弾力化**」という大きな変革を進めている。学校は裁量権を持ち、これまで教科により割り振られていた時間を、コミュニケーションや人との関わり方を学ぶ教科外活動にも使えるようになる。
- これにより、特別支援教育の発想がより活かされ、不登校などの課題を抱える子どもたちへの支援にもつながる大きな一歩であり、国は先行事業として実施を促している。

⑦理論と実践を両立した支援者研修システム

- 支援者向けの研修においては、一般論的な理論を学ぶ研修と、目の前の子どもへの具体的な対応策を扱う各論（実地研修）の両方をバランスよく組み合わせた研修システムが重要である。
- 療育センターでは、例えば作業療法士が一般論を講演する研修会と、個別のケースについて検討する研修会の両方を行っている。
- 療育センターでは、放課後等デイサービス開始時に、京都府のアウトリーチ型SST研修を利用し、実践を通じて模範的なソーシャルスキルトレーニングを学んだ経験が、効果的な研修であった。

⑧多職種連携・相互理解の重要性とソーシャルワーク的観点を取り入れた研修形式の提案

- 教育における各カテゴリーや各地域の多職種との連携と、それを可能にする相互理解が大切である。専門的なところでは、アセスメントやキャリア形成に関することも重要な視点である。
- 教育的観点に加えてソーシャルワーク的な観点が大切になる。
- 研修の形式も、講義形式だけでなく、様々な人が関わるケーススタディやグループスーパーバイズのような方法も有効である。
- 大学では、親子の関わりを詳細にコーディング（分析）する「親子相互交流療法」を実施している。座学形式の研修ではなく、PCIT療法のように、実際に親子が関わる様子を実践し、その場でコーチングを行うという方法であり、効果的であると実感している。

V.まとめ

1. 本人による選択の重要性:

発達支援において、自分のことを表現でき、子どもたちが自ら選択できることが大切である。

2. 切れ目ない連携の仕組み:

「切れ目ない連携」のための各現場の工夫について意見交換するとともに、お互いの現場を見に行くこと、また自施設の取り組みを他者に伝える、オープンにすることで切れ目ない連携や支援者の資質の向上にもつながる。

3. 研修のあり方:

支援者育成のための研修について、具体的な方法やあり方について意見交換を行うとともに、一定統一したしくみをつくることで、切れ目ない支援を保証することになる。

VI.次回の検討テーマ:

今回は、「本人保護者と共に」と「連携と適切な役割分担」の2つのテーマで意見交換を行うこととし、具体的なアイデアを持ち寄ることとなる。